

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 23 日現在

機関番号：23903

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22792216

研究課題名（和文）医療機関における妊娠期・胎児期からの虐待予防を目的としたスクリーニングの開発

研究課題名（英文）Development of the screening for the purpose of the child abuse prevention from a fetal period in the hospitals.

研究代表者

杉下 佳文（SUGISHITA KAFUMI）

研究者番号：00451766

研究成果の概要（和文）：

産科外来通院中の妊婦(妊娠 20 週以降 37 週未満)を対象に、妊婦健診時と産褥 1 か月の 2 時点において質問紙調査を行った。調査内容は、妊娠うつ・産後うつ、赤ちゃんへの否定的な感情の程度および子ども虐待のリスクアセスメントである。その結果、妊娠うつと産後うつは関連があること、産後うつと虐待が考えられる愛着障害は関連があることが明らかになった。また、本調査では、妊娠および産後うつと虐待リスク、愛着障害と虐待リスクとは関連しなかった。本スクリーニングは、臨床への示唆を得られた。

研究成果の概要（英文）：

In obstetric outpatient, we investigated survey twice of prenatal medical checkup and postnatal medical checkup. The survey contents were three questionnaires (prenatal and postnatal depression scale, bonding questionnaire for infant, and risk assessment of the child abuse). It was found that postnatal depression was related to prenatal depression and bonding disorder. In this study, it was no significant between the child abuse risk and depression. This screening acquired the suggestion to a clinical practice.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：妊娠期、胎児期、虐待予防、医療機関

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 児童相談所における児童虐待対応件数は、平成 19 年度 40,639 件に上り、年々増加の一途を辿っている。また、1 週間に 1 件の割合で虐待死亡事例が発生しており、関係機関は早急な対応を迫られている。虐待により死亡した子どもの年齢は、0 歳児が 3～4 割を

占め、その月齢は 4 割が 0 か月の新生児であった。主たる加害者は例年、実母が最も多く、その割合は全体の 5 割～8 割である。死亡した子どもに関する妊娠期・周産期の問題は「望まない妊娠/計画していない妊娠」「母子健康手帳未発行」「妊婦健診未受診」が上位 3 位であり、多胎や低体重、NICU 入院といった産後に起こりうる問題よりも、妊娠期の問題

が高い傾向を示している。また、実母の心理的・精神的問題の「育児不安」は約3割「うつ状態」は約2割に存在した<sup>3)</sup>。このことから、母親の妊娠期からの葛藤および産後の精神状態が子どもの虐待に大きく影響していることが明確となった。

(2) 「健やか親子 21」の推進における 21 世紀初頭の母子保健の国民運動計画では、4 課題があげられており、課題②である「妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援」の主な目標は「産後うつ病の発生率を減少させる」である。また、課題④である「子どもの心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減」の主な目標は、虐待による死亡数の減少があげられている。平成 17 年度に発表された健やか親子 21 の中間評価では、産後うつ病の発生率減少は、調査地域や訪問対象の違いにより単純に比較できないと評価されており、また平成 16 年度から 18 年度まで厚生労働省科学研究事業において、産後の母親のメンタルヘルスと育児支援マニュアルが作成されるなど方策はとられているが、効果などは把握されていないと評価された。さらに、課題④においては、現在のところ虐待による死亡数は減少していない状況であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的を医療機関における妊娠期・胎児期からの虐待予防を目的としたスクリーニングの開発とする。

- (1) 妊娠期において、産褥早期の子ども虐待に関するスクリーニングを挿入する
- (2) 妊娠期のどの時期が産褥早期の子どもへの愛着障害や産後うつを予測するかを特定する。
- (3) 本スクリーニングの臨床への応用

## 3. 研究の方法

- (1) 対象者：大学医学部附属病院女性診療科・産科外来に妊婦健康診査で通院している研究包括基準に従う妊婦。
- (2) 研究期間：平成 22 年 6 月～平成 23 年 3 月
- (3) 質問紙：
  - ①産後うつ病自己評価票
  - ②赤ちゃんへの気持ち質問票
  - ③虐待のリスクアセスメント
- (4) 方法：対象妊婦に対して、2 時点（妊婦健康診査時・産褥 1 か月健診時）において、質問紙調査を行った。
- (5) 解析方法：得られた得点から解析を行い、妊娠期のどの時期が産後 1 か月の子どもへの愛着障害や産後うつをより強く予測するか

を検討した。また、産後 1 か月時の母子の愛着および産後うつとの相関が強い項目について、因子分析を行い、医療機関で使用できる子ども虐待を予測できる妊娠期のより簡便な尺度の開発を考察した。

## 4. 研究成果

### (1) 妊娠・産後うつ

- ①産後うつ病自己評価票 (EPDS) を使用した妊娠期のうつ疑い(カットオフ値 9 点)は 14.3%であった。妊娠中期群では 14.4%、妊娠後期群は 14.1%と妊娠時期には差はなかった。
- ②産後うつ疑いの割合は 19.0%であった。
- ③妊娠期のうつ疑いは 17.5 倍の比率で産後うつ疑いへ移行する (表 1)。
- ④産後の EPDS 得点は妊娠期の EPDS と中程度の相関があった (表 2)。
- ⑤産後の EPDS9 点以上と 9 点未満において、妊娠期 EPDS の各項目の平均値を比較した結果、項目 6 を除き、EPDS 高得点の方が、有意に妊娠期 EPDS の各得点が高かった。項目 6 の「することがたくさんあって大変だった」を除き、他の 9 項目の各得点は、産後うつ疑いと関連があることがわかった (表 3)。

表 1 産後うつ疑いと妊娠うつ疑い者の関連

	産後EPDS		オッズ比 95%信頼区間
	9点以上	9点以下	
妊娠期EPDS 9点以上	13*	6	17.5 (5.68-54.0)
9点以下	13	105	Reference

\*Fisher の直接法 p=0.001

表 2 妊娠・産後うつ疑いと愛着障害の相関

	産後愛着障害	産後うつ疑い	妊娠うつ疑い	妊娠期愛着障害
産後愛着障害	1.000	.932**	.557**	.293**
産後うつ疑い	.932**	1.000	.537**	.254**
妊娠うつ疑い	.557**	.537**	1.000	.378**
妊娠期愛着障害	.293**	.254**	.378**	1.000

Pearson の積率相関係数

\*\* 相関係数は 1%水準で有意 (両側)

表3 産後 EPDS 得点別の妊娠期 EPDS 平均値の比較

EPDS 項目	EPDS 9点未満	EPDS 9点以上	有意 確率
	平均値± 標準偏差	平均値± 標準偏差	
1.	0.02±0.14	0.13±0.34	.021
2.	0.02±0.14	0.13±0.34	.021
3.	0.66±0.75	1.42±0.92	.000
4.	0.74±0.81	1.42±0.83	.000
5.	0.47±0.66	0.96±0.75	.002
6.	0.86±0.80	0.92±0.93	.748
7.	0.32±0.61	0.63±0.88	.046
8.	0.27±0.55	0.88±0.85	.000
9.	0.13±0.40	0.67±0.87	.000
10.	0.02±0.20	0.17±0.49	.024

(2) 愛着障害

- ①赤ちゃんへの気持ち質問票のうち、児への怒りと拒絶を表す因子(子ども虐待を考慮すべき因子)が陽性であったのは 13.1%であった。
- ②妊娠うつ疑い(EPDS9点以上)の妊婦は 13.2倍、産後に愛着障害を持ちやすいことがわかった(表4)。
- ③産後うつを疑わない(EPDS9点以下)妊婦は産後の愛着障害はなかった。
- ④産後うつ疑い(EPDS9点以上)の妊婦は、1.85倍、産後に愛着障害を持ちやすいことがわかった(表5)。
- ⑤産後の愛着障害は妊娠期の愛着障害よりも妊娠うつ疑いとの高かった(表2)。
- ⑥妊娠期の愛着障害は産後の愛着障害との関連は弱かった(表2)。

表4 妊娠うつ疑いと産後愛着障害の関連

	産後愛着障害		オッズ比 (95%信頼区間)
	得点有	得点無	
妊娠期EPDS 9点以上	18*	1	13.2 (1.71-102.5)
9点以下	68	50	Reference

\*Fisher の直接法 p=0.002

表5 産後うつ疑いと産後愛着障害の関連

	産後の愛着障害		オッズ比 (95%信頼区間)
	得点有	得点無	
産後EPDS 9点以上	26*	60	1.85 (1.56-2.2)
9点以下	0	51	Reference

\*Fisher の直接法 p=0.001

(3) 虐待のリスクアセスメント

- ①妊娠うつ疑いと胎児虐待のリスク因子は関連しなかった。
- ②産後うつ疑いと新生児虐待のリスクは「母体・新生児の身体的合併症」「実母との関係」「住環境」についての3項目に関連がみられた。

(4) 簡便なスクリーニングの開発

医療機関で使用できる子ども虐待を予測できる妊娠期のより簡便なスクリーニングの開発を目的に、産後の愛着障害や産後うつと関連があった項目について因子分析を行ったが、特異な結果は得られなかった。

(5) 得られた成果のまとめ

- ①妊娠期のうつ疑いと産後うつ疑いは関連があり、また、産後の愛着障害とも関連があった。妊娠期のうつ疑いをスクリーニングするために、産後うつ病自己評価票を使用する臨床的意義は深いと考える。
- ②産後うつ疑いは産後の愛着障害と高い相関を持っているために、産後うつ病自己評価票によるスクリーニングで、児への愛着障害を予測できる可能性が示唆された。
- ③今後は、産科学的要因や生物学的要因を変数とし、施設をこえたサンプルから、妊娠期からの子ども虐待予防に向けた尺度を検討し、臨床への応用を目指す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ①杉下佳文、栗原佳代子、塩之谷真弓、高宮智典、花山美奈子、山下洋、上別府圭子. 医療機関に求められる保健・福祉との連携—妊娠期からの虐待1次予防を含めて—。子どもの虐待とネグレクト、査読有、Vol.13, No.1, 2011, pp.32-39.

〔学会発表〕（計 2 件）

①杉下佳文、シンポジスト「児童虐待予防・早期発見・早期ケア-産科の立場から」第 9 回日本予防医学リスクマネジメント学会学術集会パネルディスカッション 1

2011.3.17 福岡

②上別府圭子、杉下佳文企画「医療機関に求められる保健・福祉との連携～1 次予防を含めて～」日本子ども虐待防止学会第 16 回学術集会くまもと大会分科会 28-14

2010.11.28 熊本

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

杉下 佳文 (SUGISHITA KAFUMI)

名古屋市立大学・看護学部・講師

研究者番号：00451766

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし